

## 小麦の赤かび病の適期防除（再掲）

令和6年産の小麦でわずかに幼穂凍死が発生しました（図1 右）。幼穂凍死の被害を受けると、遅れ穂が発生し、出穂がばらつきます。出穂の状況に応じて追加防除を検討しましょう。

過去の気象データと赤かび病の発病穂率の関係を見ると、5月中下旬に赤かび病菌の胞子飛散好適日が連続して出現した場合、発病穂率が高い傾向が見られます（表1、図2）。2回以上散布する際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐために、FRACコードの異なる薬剤を用いましょう（表2）。

**小麦の赤かび病の防除適期**

1回目 開花始期～開花期（出穂期の7日～10日後頃）（図1 左）

2回目 1回目の7日～10日後

表1 過去の赤かび病子のう胞子飛散好適日数と赤かび病の発病穂率、発生地点率

年産	飛散好適日数 <sup>1)</sup>			発病穂率 <sup>2)</sup> (%)	発生地点率 <sup>2)</sup> (%)
	4月 (日)	5月 (日)	合計 (日)		
2023 (R5)	7	16	23	0.2	36
2022 (R4)	9	13	22	1.4	82
2021 (R3)	7	20	27	2.4	64
2020 (R2)	1	15	16	0.3	36
2019 (R1)	6	5	11	0.0	0
2018 (H30)	6	11	17	1.5	64
(参考) 1998 (H10) <sup>3)</sup>	14	22	36	-	-



図1 小麦「さとのそら」の開花期の様子（左）と幼穂凍死の様子（右）

1) 赤かび病子のう胞子の飛散好適条件となった日数であり、①日最低気温10度以上、②日最高気温15°C以上、③降雨日とその翌日、これら3つの条件が揃った気象状況の日数を示す。古河アメダスによる。2) 茨城県病害虫防除所発行の病害虫発生予察情報から数値を引用。3) 1998年（平成10年）産では赤かび病が多発し、被害金額は全国で約22億円と見積もられている。4) 網掛け部分は図2に赤かび病子のう胞子飛散好適日の推移を示す。

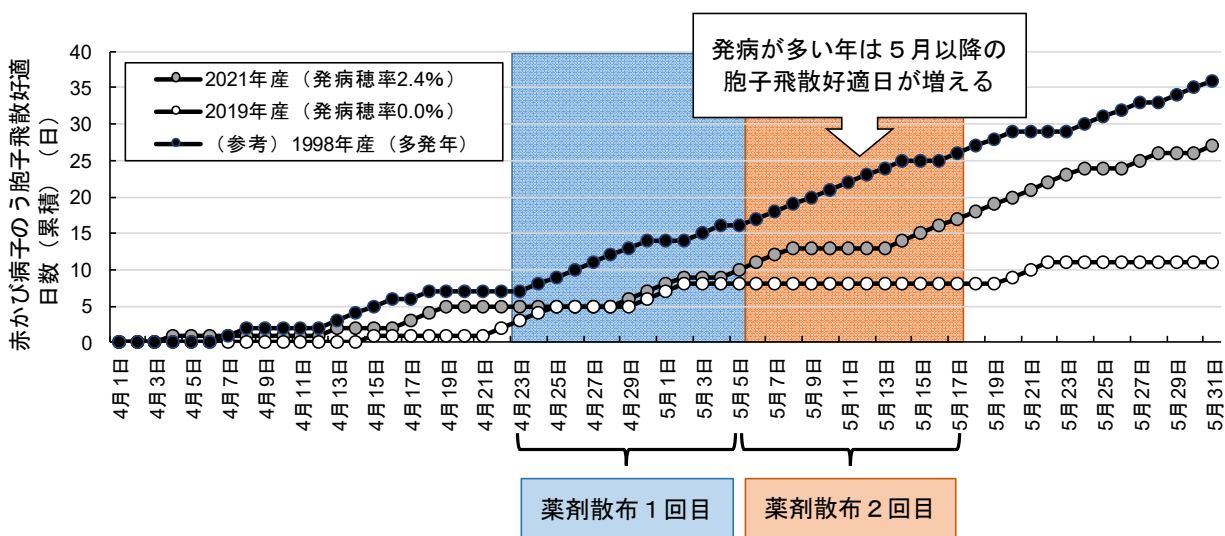


図2 赤かび病が多発した年（2021年、1998年）と少発生の年（2019年）の4月～5月の赤かび病子のう胞子飛散好適日の出現推移（古河アメダス）

表2 小麦赤かび病の防除に有効な主な殺菌剤

対象作物	薬剤名	使用方法	希釈倍数 (散布液量)	使用時期	本剤の使用回数	有効成分 (使用回数)	FRAC コード
小麦	ミラビス フロアブル	散布	1500～2000 倍 (50～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	2 回 以内	ピジフルマトフェン (2 回以内)	7 (C2)
		散布 (ブームスプレー)	250～500 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	8～16 倍 (0.8L/10a)				
	シルバキュア フロアブル	散布	2000 倍 (60～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	2 回 以内	テブコゾール (3 回以内 ただし、根雪 前は 1 回以 内、融雪後は 2 回以内)	3 (G1)
		散布 (ブームスプレー)	500 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	16 倍 (0.8L/10a)				
麦類	ワークアップ フロアブル	散布	2000～3000 倍 (60～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	3 回 以内	トコゾール (3 回以内)	3 (G1)
		散布 (ブームスプレー)	500～750 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	10～24 倍 (0.8L/10a)				
小麦	チルト乳剤 25	散布	1000～2000 倍 (60～150L/10a)	収穫 3 日前 まで	3 回 以内	プロピコゾール (5 回以内 ただし、根雪 前は 2 回以 内、春期以降 は 3 回以内)	3 (G1)
		無人航空機 による散布	8 倍 (0.8L/10a)	収穫 7 日前 まで			
	ストロビー フロアブル	散布	2000～3000 倍 (60～150L/10a)	収穫 14 日 前まで	3 回 以内	クソキシメチル (3 回以内)	11 (C3)
		散布 (ブームスプレー)	500 倍 (25L/10a)				
	トップジン M 水和剤	散布	1000～1500 倍 (60～150L/10a)	収穫 14 日 前まで	3 回 以内 (た だ し 出 穂 期 以 降 は 2 回 以 内)	チオファネートメチル (4 回以内 ただし、種子 への処理は 1 回以内、散布 及び無人航空 機散布は合計 3 回以内、出 穂期以降は 2 回以内)	1 (B1)
		散布 (ブームスプレー)	250 倍 (25L/10a)				

農薬を使用する際は、必ず使用前にラベルを見て、対象作物、希釈倍数や散布液量、使用時期、使用回数等を確認しましょう(令和6年4月1日登録確認)。農薬散布時には風向、風速、散布位置やノズルの向き等に注意し、周辺作物に農薬が飛散(ドリフト)しないように注意しましょう。